

「羅生門」試論（上）

——谷崎潤一郎「刺青」に注目して——

藤村 猛

はじめに

芥川龍之介の「羅生門」（初出『帝国文学』、大4・11）と言えば、周知の通り、高校の教科書にも多く収録され、「国民的文学」と見なされている小説である。この作品の研究論文も多く、時代と共に、作品解釈も変遷し、又、近年、「羅生門」下書メモノート¹や断片等も公開され、新しい「羅生門」研究の一面を拓いている。

本稿は、この芥川の代表作とでも言うべき「羅生門」の解釈の一視点として、「羅生門」と耽美派作家の谷崎潤一郎の「刺青」との関連を考察して、そこから「羅生門」の読みを試みてみようとするものである。

—

それでは最初に、簡単に「羅生門」前後の芥川を見てみよう。

大正三・四年の芥川の状態を象徴する語として、「寂寞^{ぼく}」と「力」の二つが考えられる。

前者は芥川の当時の書簡の中に頻出する「さびしい」という孤独感

であり、後者は彼が当時愛読した、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」の読後感に代表される、彼自身も望んだ「力」である。

以上を、当時の書簡から列挙してみる。先ずは前者のものから。

要するにひとりであるより外に仕方がないのだが時時はまったくさびしくつてやり切れなくなる（恒藤蒸宛 大正3・5・19）

此頃僕はだん／＼人と遠くなるやうな気がする。殆誰にもあはうとは云ふ気がおこらない時々は随分さびしいが仕方がない

（同前 大正3・11・30）

唯、かぎりなくさびしい

（同前 大正4・2・28）

毎日不愉快な事が必ず起る。人と喧嘩しさうでいけない。自分とは誰ともうっかり話せない。そのくせさびしくつて仕方がない。馬鹿馬鹿しい程センチメンタルになる事もある。

（同前 大正4・3・9）

桜の葉が緑の中に点々と鮮な黄を点じたのを見て急に秋を感じてさびしかった。

（同前 大正4・9・20）

後者のものとして、次のようなものがある。

其代り今までの僕の傾向とは反対のものが興味をひき出した

僕は此頃ラツフでも力のあるものが面白くなつた何故だか自分にもよくわからないたゞさう云ふものをよんでゐるとさびしくはない気がする。

(恒藤恭苑 大正3・11・30)

この頃は少し頭から天才にのぼせてゐる。

(同前 大正4・9・20)

(又、いささか後年のものだが、當時を回想したものとして)

僕一時(二十三才前後)精神的に革命を受け始めてゲエテの如きトルストイの如き巨匠を正眼に見得たりと信ぜし時あり僕をしてその境地に置きしもの種々複雑なる事情あれどジアン・クリストフの影響大なりしは今に至つて忘るゝ能はず(中略)

僕今も猶夜座して彼等の作品に対する時彼等の靈旋風の如く来つて僕の書齋に満つるが如き心地す僕が生きんとする勇氣を感ずるは誠にかゝる瞬間なり彼等の靈一として苦惱のステイグマタを帯びざるなししかも又天上の微笑常にその面に輝けるを見る彼等既に生きんとして悪闘したり僕豈戟折れ柄挫くるを辞するものならんや

(佐佐木茂索宛 大正8・7・31)

これらの孤独感と芸術的感興は、青春のものであろうが、この二種類の心情は、彼が当時恋していた吉田弥生との恋愛の顛末と共に、大きな振幅を持つものである。これには彼の繊細な感受性という資質的なものや、彼が置かれていた状況——下町の中堅階級や養子である。こ

と——に一つの要因があろう。

又、この時期、彼がミステリアスなものを好んでいたことを指摘しておかなければならない。日常とかけ離れたものを好んでいるのは、芥川の好奇心と同時に彼の置かれていた状況、それは彼にとって束縛

するものと受け止められているが、そこからの束の間の脱却の意図もあつたろう。

それでは、「羅生門」の執筆状況はというと、現在のところ、大正四年十一月発行の「帝國文学」に対して、その脱稿は、およそ九月頃だと推定されている。そしてその構想は、前年の末から始まったという説^{注2}もあるが、下書きメモノートあたりから察して、大正四年の夏頃、短期間の構想ではなかったかという説^{注3}があり、大体、春から夏にかけて構想され、九月一杯までに脱稿したと見るのが、無難であろう。

いささか先走つて言うと、当然、その執筆には、前作品群への周囲の反応のなさへの焦りや不快感などがあつたものと思われる。芥川自身は、書くことのみで満足していたと言及^{注2}があるが、それが彼の心情のすべてではないだろう。「羅生門」に関して言えば、同じ後年の回想で、この作品を加藤武郎が読んだ事実^{注3}に言及したり、「あの頃の自分の事」別稿(大正8・1)では、「勿論それでも心細いことは、依然として心細かつた」とあり、自筆年譜で、「世評未だ一言をも加へず」とわざわざ書いていることから考えても、彼が自分の作品の評価に超然としていたとは思われない。後年、彼は新聞などの自作の悪評に、人一倍、神経をとがらせて^{注3}いるのである。

二

それでは、「羅生門」まで、芥川にどのような作品があるか簡略に見てみよう。

「羅生門」以前の作品として、次のようなものを、彼は発表している。

「大川の水」〔心の花〕大正3・4)

「老年」〔新思潮〕大正3・5)

「青年と死」〔新思潮〕大正3・9)

「ひよっとこ」〔帝国文学〕大正4・4)

これらが、「羅生門」執筆までに発表された作品群である。各々を分析、評価することはできないが、各作品の共通点を一・二指摘すれば、いずれも当時の耽美派の影響を受けているということである。

例えば、「大川の水」には北原白秋や永井荷風の影響があるとの指摘^{注⑥}があり、「青年と死」には「メーテルリンク風の手法」という指摘^{注⑦}、「老年」や「ひよっとこ」には谷崎潤一郎の影響があることが指摘^{注⑧}されている。

また、これらの四作品の中で、「羅生門」と同様、原典を持つものと言い得るのは「青年と死」だけであるが、他の三作品には、芥川の育った下町や芥川家の持つ情趣が色濃く流れているのである。

つまり、四作品とも、全くのゼロからの構想執筆ではなく、芥川の身辺に親しいもの、もしくは当時読んでいた小説などの影響があったということである。同様に、「羅生門」も「今昔物語」の一小話を原典としているが、それ以外にも、当時の読書であったルイスの「マシク」やプウチエの「橋の下」の影響もあると見られている。

それでは、「老年」や「ひよっとこ」に表れているように、「羅生門」に谷崎潤一郎の影響がどの程度あるのか。だが、その前に、当時の芥川の谷崎観を一瞥しておく。

次の文章は、大正四年の冬、芥川が帝劇で谷崎を見た時の回想である。

するとその入口に、黒い背広の下へ赤いチョッキを着た、背の低い人が佇んで、袴羽織の連れと一しよに金口の煙草を吸つてゐた。久米はその人の姿を見ると、我々の耳へ口をつけるやうにして、「谷崎潤一郎だぜ」と教へてくれた。自分と成瀬とはその人の前を通りながら、この有名な耽美主義の作家の顔を、偷むやうにそつと見た。それは動物的な口と、精神的な眼とが、互に我を張り合つてゐるやうな、特色のある顔だった。

（あの頃の自分の事）四 大正7・12）
その頃の芥川の目に映った谷崎は、花形作家であり、彼は、同じ帝大の先輩として、谷崎に憧憬の念を持っていたようである。そして、彼の谷崎文学の評価は、例えば、次のように表される。

氏はありとあらゆる日本語や漢語を浚ひ出して、ありとあらゆる感覚的な美を（或は醜を）、「刺青」以後の氏の作品に螺鈿の如く鑲めて行つた。しかもその氏の *Les Eaux et Canes*（筆者注・ゴオティエの詩集の題名）は、朗々たるリズムの糸で始めから最後まで、見事にずつと貫かれてゐた。自分は今日でも猶、氏の作品を読む機会があると、一字一句の意味よりも、寧ろその流れて尽きない文章のリズムから、半ば生理的な快感を感じる事が度々ある。（同前）

「妖気飄蕩たる耽美主義」の作家として、そして「比類ない語の織物師」として芥川は谷崎を見ている。又、これは後年の文章^{注⑨}だが、「刺青」の谷崎氏は詩人だったと、芥川は「刺青」の頃の谷崎を見ている。

又、これも後年の文章で、大正六・七年頃のことであろうが、芥川

の谷崎観がうかがわれるものがある。

彼は彼の先輩と一しよに或カツエの卓子に向ひ、絶えず巻煙草をふかしてゐた。彼は余り口をきかなかつた。が、彼の先輩の言葉には熱心に耳を傾けてゐた。

「けふは半日自動車に乗つてゐた。」

「何か用があつたのですか?」

彼の先輩は頰杖をしたまま、極めて無造作に返事をした。

「何、唯乗つてゐたかつたから。」

その言葉は彼の知らない世界へ、——神々に近い「我」の世界へ彼自身を解放した。

(或阿保の一生)五 昭和2・6)

このように、彼は谷崎の自由奔放さに憧れの気持ちを持っている。これは大正四年頃にも、谷崎の行状を見聞する時にはあつたのではないか。

翻つて、芥川はと言うと、彼は他人に、そして、近親者にすら遠慮し、吉田弥生との失恋の顛末からも分かるように、自分の思う通りに行動し得ない。早くから自分の不充足状態を自覚し、苦悩している。

こうした時期に、「羅生門」は、無名作家として、孤独の中で、ある転機を感じつつ、近親者達、そして、^{注⑩}みじめな自分に愛憎を覚えつつ、構想されていったのである。

この時期、彼が、谷崎潤一郎に憧れの念を持ち、^{注⑪}文学的に一つの目標としていたことは間違いないだろう。その時、文学的にもすぐれており、後年まで評価していた、又、谷崎二十五歳(大正四年頃の芥川とほぼ同年齢)の文壇的処女作「刺青」が、芥川の念頭にあつたので

はないかと推測しても全くの見当違いではなからう。

三

確かに、「刺青」と「羅生門」と言うと、明と暗との違いがあるように一見思われるが、案外、両作品には近さもある。「刺青」と「羅生門」の共通点は、作家の周辺から、簡単に言うと、どちらも作家として出発点となつた、つまり、両作品とも、彼らの文学の原点とでも言つべき作品だということである。「刺青」には後の谷崎文学のエキスが、「羅生門」には芥川文学の縮図があると云つて良からう。

次に、いずれも、当時の文壇に認められる前の作品であるということである。確かに、「刺青」(明治43・11)を含む諸作品は、後に永井荷風によって賞賛された(明治44・11)。しかし、「刺青」そのものは、発表当時、高く評価されていなかったのである。これは芥川の「羅生門」と次の作品「鼻」との関係に似ている。(そして、漱石という大家によって激賞され、文壇に華々しくデビューしたことも。)つまり、作家の原点(処女作)とされる両作品は、発表当時、あまり評価されない種の作風(ある種の新しさ)を持っていたということ、その為、後に荷風らによって評価され、翻つて、両作品の価値が文壇に再確認されたということである。これには、作品の内容の新しさ以外に、彼らが無名の作家であり、掲載雑誌も一流のものでなかつた、又、前述したことも重複するが、当時の文壇の中心勢力とは肌合いを異にしていたという理由が考えられる。

第三に、この両作品は、程度の差はあれ、当時の彼らの「思い」を色濃く含んでいるということがある。簡潔に言うと、「刺青」は谷崎の

「彼の頭に醗酵する怪しい悪夢を材料にした、甘美にして芳烈なる芸術」（「異端者の悲しみ」大正6・7）を、「羅生門」は、ミステリアスなものを好みつつ、「半年ばかり前から悪くこたはつた恋愛問題」とは反対の「なる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説」（別稿）あの頃の自分の事」をめざしたものである。いずれにしても、彼らには書きたいものがあり、同時に作家になりたいとの強い願望がその底にあったのである。

それでは、作品の中身から考えると、前述したように、この両作品には共通性はないように見える。一方は人間の、それも妖婦の持つ美とそれに対する服従（マゾヒズム）を、他方は追いつめられた人間のエゴイズムを取り扱っている。が、両作品を短く要約すると、「刺青」は、「小娘が妖婦になる話」であり、「羅生門」は、「下人が盗人になる話」である。つまり、いずれも一種の変身譚なのである。ただ、それに前者は「墮落した芸術家」、後者には「盗人である老婆の話」が脇役に組み合わされている。そして、彼らは下人達を、結果として、変身させる働きを持っているのである。

又、「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」との「刺青」の基調は、「羅生門」（初稿）の世界では、鮮明ではないが、強者対弱者という対立関係と共に、揺曳していよう。そこでは、弱者である老婆は徹底的に醜者として描写されているし、下人のラストシーンにおける姿には、醜と言うよりは、ある種の颯爽としたものが感じられるまいか。つまり、「羅生門」の下人を「己が生の主人公となる物語」という視点から見れば、下人は弱者から強者へと変身する、つまり、作品前半の「途方にくれてゐた」下人から行動者の下人への変化に、相

対的に下人の醜から美への変化が表れているのではないか。

四

それでは、両作品の相違はどんなものがあるかと言うと、前述の作品の中心が、「刺青」が美やマゾヒズムであり、「羅生門」がエゴイズムであるということ以外にも、作品の時代設定の違い、主人公達の置かれている状況の違い、登場する男女の関係の違い等々がある。それ以外の相違点として、次に両作品の女性の描かれ方の差に注目したい。

「刺青」の女は美しく、谷崎の理想の女性であり、「羅生門」の老婆は前章でも触れたが、動物の比喩に彩られ、必要以上に醜化されている。換言すれば、前者は美化され、後者は戯画化されている。いわば、この女性に対する描写の違いが、両作家の作品に対する姿勢の差を表しているのではないかと思われるのである。

本来、「刺青」は同時代を舞台にして、もっと谷崎自身が投影された作品であつたらしい。つまり、「墮落した芸術家」としての谷崎の物語が描かれる筈だつたということである。が、作品の中心は妖婦の誕生となつてしまつた。ここには谷崎のマゾヒズムの特色——虚構の上になり立ち、継続を求めマゾヒズム——があろう。いわば、谷崎と清吉の距離である。清吉は妖婦の誕生に燃えつきる。谷崎は刺青をした後の清吉のように空虚にはならない。何故ならば、谷崎の快楽は拝跪する姿勢の自覚にあり、その持続を求め、現実はそのままで谷崎の世界に飛翔しない。つまり、虚構の中でのみ、女は十全に美化しうるのである。

それに対して、「羅生門」は、やはり、芥川の失恋の影響下にある。必要以上の老婆の醜さには、恋愛の対象である吉田弥生ではなく、結婚を断念させた近親者達のエゴイズムへの憎悪の影響があるようである。故に、老婆は単に醜い弱者だけではない。後述するが、老婆により強者のな面も感じられるのである。生活者のしたたかさであり、人間の奥深さを感じさせる悪魔的な面である。

だが、芥川の場合は、小説世界に限定されるのであり、このような醜化は頭の中でのみ行われたのである。それに対して、谷崎は、周知の通り、実生活でも理想とする女の美化を追い求めたのである。

次に、両作品の相違（共通性も含む）として、モラル（道徳）に対する姿勢の差に注目してみたい。

「刺青」には通常の意味でのモラルはない。わずかに、清吉に「刺青師に墮落」という表現や、女の自己の本質（未喜や「肥料」という絵の女の性分）を見ることへの躊躇に、道徳的なものが垣間見える。が、それも簡単に追い払われてしまい、清吉は元より、女も清吉による刺青によって道徳を超えるのである。

それに対して、「羅生門」の下人も結果的には道徳^{注⑬}を超える。が、そこに到るまで彼は善悪の観念、道徳の強い影響下にある存在なのであった。羅生門の下で「途方にくれてゐた」下人、これが下人の本来の姿であった。「刺青」の女にも清吉にも、この「途方にくれてゐる姿」はない。

以上のように、「刺青」と「羅生門」の特色を、共通点・相違点から簡単に見てくると、その中でより考えざるを得ないのは、「羅生門」の「下人が盗人になる話」の内実であり、その一つとしては、下人が如何

に造型され、変化していったかである。

五

「羅生門」は芥川の言によれば、作品が出来上がるまでに何度も構想を変えた作品^{注⑭}であるようである。そして、その構想を具体的に示すものとして、近年公表された「羅生門」下書メモ・断片^{注⑮}がある。これらは、主として、作冒冒頭部に関するものであるが、ある程度、作品の構想を示すものである。（本稿では主要と思われるメモのみ考察の対象とする）ただ、これらのメモの執筆順は不明であるので、その構想の正確な変遷は明らかではないが、おおよその傾向として、原典の「今昔物語」の原話から「羅生門」への流れに沿っているのではないかと思われる。

それでは、次に、原典である「今昔物語」巻廿九の第十八「羅生門」にて上層に登り死人を見る盗人のものがたり^{注⑯}の冒頭部分を引用する。

今は昔、摂津の国辺より、盜せむがために京に上りける男の、日の未だ暮れざりければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それにみえじと思ひて、門の上層にやはら掻きつき登りたりけるに、見れば火髯かに燃したり。

これが、芥川の最初の構想と思われるものでは、こうなる。

交野五郎が、摂津の国から京都へ上つて来た時の事である。

五郎は、鎗物師を商売にし^{注⑰}ゐた下司であるが、此頃の凶年に口を糊する事が出来なくなつたので、僅な路用を便りに遙々、京都へ上つて来たのである。

ここから、現在の「羅生門」の冒頭部まで様々な変化を見せる。「羅生門」下書メモノート・断片」は、紙数の関係で、全部を紹介できないので、主なものが以降、どのような変化をしていったのかを、簡単な表にしてみることにする。

主人公の名前	状況	場所	気候
② 交野平六	愈々盗人になる より外はないと 考へた 使ひ残した路用 の金は(略)昨 夜泊った旅籠で 宿賃にとられて しまった		
③ (同右)	朝から空腹を かゝへてあてど もなく洛中を歩 いてゐた	羅生門 の下	日の暮か らふり出 した雨
④ 一人の男	雨やみをまて ゐた	(同右)	或る日の 暮れ方
⑤ 一人の侍	(同右)	(同右)	(同右)

念の為に「羅生門」に最も近いと思われるメモ⑤を引用しておく。
 ⑤ 或日の暮れ方の事である 一人の侍が 羅生門の下で雨や
 みをまつてゐた 広い門の下にはこの男の外に誰もゐない
 最初のものを①や②と比べると、現在の「羅生門」にかなり近いこ
 とが分かる。

このように主人公の名前や状況・場所・天候などへの変遷を見てく
 ると、芥川が如何に「今昔物語」の原話から、自分の「羅生門」を作
 り上げていくのに苦勞していたかが分かる。

簡単に言うと、①では、原話を受け、主人公に名前や出身などの具
 体的なものを付与している。しかし、彼が盗人になろうとして上京し
 たことは明示されていない。②もそれを受け継ぐが、平六と名前を変
 え、京都で金を使い果たし、「行倒れになるか」「盗人の仲間にはひる
 かするより仕方がない」と思っている。が、表にあるように、「愈々、
 盗人になるより外はないと考へた」とあるように、「羅生門」の下人の
 ように「途方にくれてゐる」姿とは遠い。③になると、①にあるよう
 に交野平六が京に来るまでのことが削除され、羅生門の下で雨やみを
 する姿が描写される。そして、④では、「一人の男」というように名前
 を失い、主人公の過去の描写(説明)はなくなり、⑤のように、「一人
 の侍」となる。

つまり、大きな変化の一つは、盗人、もしくはその志望者(今昔物
 語)から、京の町でゆきづまった交野平六(五郎)へ、そして失業し
 て「途方にくれる」一人の下人(「羅生門」)という変化である。

では、このような変遷が、何故、行なわれたのかを考えてみる。

第一には、芥川が「羅生門」で描きたかった主題の為の変更にいう

のが、その大きな理由であろう。例えば、石割透氏の言うように、「人間一般の普遍的な属性を剔抉しようとした芥川の意図」がそこにはあったと考えると理解しやすい。又、最初から主人公が盗人では、「途方にくれてゐる」男が造型されず、その後の盗人になっていく過程が生じなくなるのである。

第二には、一と関連するが、原典である「今昔物語」からの離脱の欲求である。その底には、「羅生門」を「単なる歴史小説」として読まれることへの芥川の反発があり、「小さくとも完成品を作りたい」との願望がある。「今昔物語」そのままでは模倣でしかなく、「羅生門」を芸術作品にまで高めることが、作家芥川の強い願望であつたらう。

第三には、「羅生門」に己れの心情を投影しやすくする為である。撰津出身の鋳物師である交野五郎（平六）では、個性を持ち、当然のことながら、芥川とは別人格となる。そして、それは、「羅生門」の主人公を己れのコントロールの下に置くこと、即ち、「材料と自分の心もちとが、ぴつたり一つ」にする条件整備の為の変更である。そして、これが結果的に、「羅生門」創作の原動力の一つであつた「なる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた」との思いと合致するのである。

以上のような理由から、「羅生門」の構想は変化していったのだろうが、ここで、注目したいのは、「羅生門」下書メモノート・断片」に登場する「交野平六」である。

六

芥川は後年「偷盗」〔中央公論〕大正6・4、7で盗賊の一人に、

「交野平六」を登場させている。しかも、彼は、その他多勢の一人ではなく、作品後半では、一種の狂言回しとしての役割をも有している。そこで彼はどのような人間として、作者から造型されているのかであるが、その前に、名前を持っていない主人公についていささか考えてみたい。

「羅生門」前後の作品から、名前を持っていない主人公を探すと、例えば、「芋粥」の五位がいる。「某五位」と呼ばれる男である。彼は作中では「平凡な男」であるが、芥川は特に、彼に「世間の迫害にべそを掻いた人間」との一面を与えている。いわば、五位は世間によくいる弱者であり、「とほうにくれてゐる」下人と通じる存在なのである。そして、それは原典の「今昔物語」に描かれた人物達とはいささか異なっている。彼らはより単純であり、より行動的である。

実は、「偷盗」の交野平六も「今昔物語」の世界の住人に近い存在なのである。「偷盗」では、彼は盗賊として単純で乱暴ではあるが、仲間の窮地を見捨てぬ男である。一廉の盗賊というイメージがある。そして、これが交野平六という名前を持つ者への芥川のイメージでもあろう。「羅生門」創作の頃もそうではなかつたらうか。そうすると、「偷盗」の交野平六のような男では、途方にくれることもないだろうし、老婆によって改心することもないだろう。そのような彼ならば、下書メモにある如く、多少の躊躇はあるにしても、「交野平六は、愈々盗人になるより外はない」と決心するのであろう。つまり、途方にくれる下人よりは、積極的に生きるのが、交野平六なのである。

そして、名前にこだわる理由の一つとして、ここに谷崎の「刺青」の清吉との共通性があると言つと、それは強引すぎるだろうか。平六、

清吉、両者共、墮落しながらも、己れの生を生きている。そして、平六という名前と清吉という名前の与えるイメージは、対照的かもしれない。だが、両者共、まず、平易な名前である。「今昔物語」に登場する他の盗賊の名前「袴垂」「多裏丸」「調伏丸」などに比べれば、平六という名前はおどろおどろしくなく、無難な名前である。しかも太郎、次郎に比べれば、個性がある。清吉の方もそうである。「刺青」に登場する他の刺青師の名前と言えば、「ちやり文・奴平・こんく次郎・達摩金・唐草権兵衛」である。如何に清吉という名前が粹であるかが分かる。主人公の命名は作家の特権である。そして、名前は主人公のイメージ造形に大きな力を持つ。谷崎が「刺青」の主人公に清吉という名前を付けた時、そこには少なからぬ思い入れがあったにちがいない。谷崎は「墮落した芸術家」に己れの物語を描こうとしたのだから。(同様に、「病人の愛」の譲治^註、「細雪」の貞之介、「卍」の孝太郎などにも、谷崎の命名の思い入れを推測できるのではないか)芥川も、清吉という名前に谷崎の思い入れを感じたのではないか。「氏は罪惡の夜光虫が明滅する海の上を、まるでエル・ドラドでも探して行くやうな意気込みで、悠々と船を進めて行つた」(「あの頃の自分の事」と、芥川は見ているのである。彼は清吉に谷崎の面影を読み取っていたに違いない。翻つて言えば、交野平六という名前に、芥川は自分のあるべきイメージ(行動者像)を見ていたのではないか。作家の夢が、これらの名前に込められていると思うのである。

以上は推測の域を出ないのであるが、芥川の「交野平六」に対する愛着が、後年「偷盜」の作中に登場する理由であったのは間違いないからう。芥川は交野平六という単純な男に、一端は自己の夢を託したの

だろうが、「途方にくれる」下人の像を経てから、盗人になることの方がよりドラマティックになるとの計算をしたのかもしれないし、老婆に対する引剝に、その頃の彼を取り巻いている束縛からの脱出を夢見ていたのかもしれない。

谷崎が「刺青」で、清吉という名前の男に己れを語らせ、夢を見ようとしたのと同様に、芥川も、主人公に己れの夢を表現しようとするスタイルを、踏襲しようとしたと考えるのは考えすぎだろうか。

(注)

(1) 東郷克美「芥川龍之介の『寂莫』」(『国文学研究』68 昭54・6)

参照。

(2) 海老井英次「羅生門」(『国文学』昭45・11)

(3) 清水康次「羅生門」への過程」(『芥川文学の方法と世界』和泉書院 平6・4)

(4) 「羅生門」の後に」(大6・9)より。又、「羅生門」が今までの作品の中で最も優れた作品だという芥川のメモ(『羅生門

への弁明)もある。(『芥川龍之助資料集』山梨県立文学館 平

5・11)

(5) 松岡譲宛書簡(大6・10・30)参照。

(6) 松本常彦「大川の水」論」(『原景と写像』「原景と写像」刊行

会 昭61・1)

(7) 山敷利男「芥川の短歌『桐』について」(『国文学研究』32

昭40・11)

(8) 吉田精一「芥川龍之介」(新潮文庫による)及び、佐伯彰一「芥

川と谷崎——「ひょっとこ」と「幣間」と——〔解釈と鑑賞〕
昭33・8)

(9) 「文芸的な余りに文芸的な」二(昭2・4)より。又、芥川が谷崎家を初めて訪問したのは大正五年前半頃であることが、未定稿「谷崎氏に最初会ったのは」〔芥川龍之介資料集〕山梨県立文学館 平5・11)から分かる。

(10) 近親者への憎悪が「羅生門」構想に少なからぬ影響を与えていることは既に指摘されているが、芥川自身、後に、当時の自分には「自意識過剰」「傲慢さ」があったとの反省のメモがある。
〔「羅生門」への弁明〕

(11) その二例として、少し後のことになるが、「羅生門」出版記念会に谷崎が出席したのを、芥川は大変喜んだという。

(12) 杉本俊「下人が強盗になる物語——『羅生門』論——」〔日本近代文学〕41 平1・10)

(13) 注(10)の同じメモで、芥川はこの作品でモラルの問題をとり上げたかったとの言及がある。

(14) 「一つの作が出来上がるまで——『枯野抄』——『奉教人の死』——」(大9・3) 参照。

(15) 「国文学」(昭60・5)所収のもの及び、「芥川龍之介資料集」(山梨県立文学館 平5・11)から引用した。その際、前掲書の関口安義氏の解説及び、注(3)の清水康次氏の論文を参考にした。

(16) 引用は、「今昔物語」〔朝日古典全書〕から。

(17) 石割透「羅生門」〔芥川龍之介——初期作品の展開〕有精堂 昭60・2)

(18) 「校正後に」(大5・3)より。

(19) 「校正後に」(大5・9)より。

(20) 「私と創作——『煙草と悪魔』の序に代ふ——」(大6・6)より。

(21) 「別稿 あの頃の自分の事」(大8・1)より。

(22) 既に指摘されていることだが、「交野平六」という盗人のことが、「古今著聞集」偷盗 第十九)にある。又、同じ「偷盗 第十九)に、「小殿平六」という盗人が登場する。両者共、単なる盗賊ではなく、前者は後鳥羽院の「御中間」に、後者は源判官康仲の「侍」となる。交野平六は、両者の合成した名前であり、「古今著聞集」のこの二人の盗賊は、芥川の「交野平六」に何らかの関連があるのではなからうか。

(23) 「痴人の愛」の譲治の名前について、小森陽一氏は、対談の中で、「あの命名はかなりはっきりそういうスタンスに立つことを自覚していた」と言及している。詳細は「谷崎礼讃——闘争するデイスクール」〔国文学〕 平5・12) 参照。

(ふじむら たけし)